中國文學報　第八十三冊

春と無賴

中原健二
佛教大學

はじめに

杜甫の成都時代の詩について、鈴木虎雄『杜詩』（岩波文庫）は次のように言う。

この時代の詩は、近體はときどき疎宕（そとう）狂漫の語をなすとはいえ、概して悠々自適、自然の妙あるものが多い。

（第一冊二五四頁）

この近體における「疎宕狂漫の語」に、「絶句漫興九首」其一の

無賴春色到江亭　　無賴の春色　江亭に到る

や同其五の

顚狂柳絮隨風去　　顚狂なる柳絮　風に隨って去り
輕薄桃花逐水流　　輕薄なる桃花　水を逐って流る

といった句①が含まれることは想像に難くない。そうした「疎宕狂漫」の氣分を構築するために中心的役割を擔っている語が、「無賴」「顚狂」「輕薄」であろう。これらは人の氣性や行動を表す語で、いずれもマイナス方向の價値觀を內包しているがゆえに、「春色」等と結びついて「疎宕狂漫の語を爲す」こととなったと考えられる。小稿では、杜甫の成都時代の詩の特徵を、「無賴」を中心にした詩語の面から探ってみたい。

一

「無賴」の原義の說明としては、唐の馬總『意林』卷四

が後漢、應劭の『風俗通』を引いて次のように言うのが、[2]要を得ているだろう。

方言曰、人不事事而放蕩、謂之無賴、不可恃賴也、猶高祖謂太上皇云、大人以臣無賴也

方言に曰く、人の事を事とせずして放蕩なる、これを無賴という、と。恃賴す可からざるなり。猶お高祖の太上皇に謂いて、大人以わん　臣は無賴なりと、と云うがごとし。

高祖とは漢の高祖で、その言は『史記』高祖本紀に見える。なお、現行の揚雄の『方言』には該當する文は見えない。「無賴」は辭書などでいくつもの語義が與えられることがあるが、[3]要するに「不可恃賴」を基本として押さえておけばよいだろう。ただし、他者から見て主體が「恃賴できない」場合と、主體にとって「恃賴すべきものがない」場合との、二方向の意があることには留意しておきたい。ここから引申され、さまざまな文脈で「無賴」は使用されたのであり、「放蕩」などの語に置き換え可能であるのは前者の範疇に入るし、「無聊」や「無聊賴」なら後者に入るだろう。

次いで、六朝までの詩で「無賴」を用いた例を求めると、次の三例を得る。

A含毫意不迷　毫を含んで意迷わざるも
長嘆情無賴　長嘆す　情の無賴なるを
（梁、簡文帝「傷離新體詩」『藝文類聚』巻二九）

B唯憎無賴汝南雞　唯だ憎む　無賴なる汝南の雞の
天河未落猶爭啼　天河　未だ落ちざるに　猶お爭い啼くを
（陳、徐陵「烏棲曲二首」其二『徐孝穆集箋注』巻一）

C箇人無賴是橫波　箇の人の無賴なるは是れ橫波
黛染隆顱簇小蛾　黛は隆き顱を染めて　小蛾簇まる
（隋、煬帝「嘲羅羅」『古詩紀』巻一三〇）

いずれもいわば玉臺新詠的世界を背景に持つ。Aは別れ

の思いを「無賴」で表しており、すでに述べた「無聊」の意で理解できる。Cは當てにならぬが魅惑的な美人の流し目をうたう。ともに人に關して使われた例である。Bはこれと異なって、夜も明けぬのに鳴き始めた鷄を、後朝の別れを惜しんで「無賴」と形容する。つまり、人の氣質や行動ではなくて、無情のものである鳥の形容に使われている。では、杜甫はどうであろうか。④杜甫の「無賴」はすでに擧げた例を含めて六例ある。いま制作年順にすべて擧げよう。

(1)

韋曲花無賴　韋曲　花は無賴にして
家家惱殺人　家家　人を惱殺す
綠尊須盡日　綠尊　須らく日を盡くすべし
白髮好禁春　白髮　好し　春に禁えん

（「奉陪鄭駙馬韋曲二首」其一　五律）

(2)

眼見客愁愁不醒　眼のあたりに客愁を見れば　愁いは醒めざるに
無賴春色到江亭　無賴の春色　江亭に到る
卽遣花開深造次　卽ち花をして開くこと深く造次ならしめ
便教鶯語太丁寧　便ち鶯をして語ること太だ丁寧ならしむ

（「絶句漫興九首」其一　七絶）

(3)

老罷休無賴　老い罷れば無賴を休めよ
歸來省醉眠　歸り來らば醉眠を省かん

（「聞斛斯六官未歸」　五律）

(4)

不分桃花紅勝錦　分らざらんや　桃花の紅きこと錦に勝るを
生憎柳絮白於綿　生に憎む　柳絮の綿より白きを
劍南春色還無賴　劍南の春色　還た無賴にして
觸忤愁人到酒邊　愁人に觸忤らいて　酒邊に到る

（「送路六侍御入朝」　七律）

(5)

羯胡事主終無賴　羯胡の主に事うること　終に無賴
詞客哀時且未還　詞客　時を哀しんで　且つ未だ還らず

（「詠懷古跡五首」其一　七律）

(6)　與汝林居未相失　汝と林居して　未だ相失わず
近身藥裹酒長攜　近身の藥裹　酒　長に攜う
牧豎樵童亦無賴　牧豎樵童も亦た無賴
莫令斬斷青雲梯　斬りて青雲の梯を斷たしむる莫かれ

（「寄從孫崇簡」　七古）

まず、(3)(5)(6)を見てみよう。(3)は成都時代の作で、墓誌銘の原稿料の取り立てに行って戻らない斛斯六官に呼びかけたもの。[5] 賣文という不安定な生業に賴っての暮らしを「無賴」で形容したわけで、原義に副った用法と言える。(5)(6)は夔州時代の作で、「羯胡」は安祿山を指す。「羯胡」「牧豎樵童」を「無賴」というのは、同様に原義に副った使い方と見做してよいだろう。つまり、いずれも人について言う。ところが、(1)(2)(4)は明らかに異なった使い方をしている。まず氣づくのは、すべて春という季節に結びつけられていることである。前掲のA～Cがそうであるように、杜甫以前に特定の季節に結びつけて使用した例はない。ただ、無賴が人以外を形容している點ではBと同樣であり、杜甫がBを意識していた可能性はあろう。

(1)は『詳注』で天寶末年、安祿山の亂以前の作とされ、『宋本杜工部集』の編次では左拾遺在任時の作とされる。いずれにしても成都時代以前の作である。韋曲は杜曲とともに長安南郊の地で、貴顯の邸宅の多い場所として知られる。杜甫は貴公子鄭駙馬（鄭潛曜）に付き從って韋曲の庭園を巡った折に、この詩を作ったらしい。韋曲では處々の庭園で春の花が咲き誇っていた。「韋曲花無賴」とは、肯定されるべき春の景物と否定的價値を含む「無賴」の語を結合させた點で、讀み手の意表を突いた斬新な表現である。また、無情のものである春の花を、有情である人についていう「無賴」の語で形容した、擬人法の一種である點にも留意しておきたい。擬人法という點では前掲Bの徐陵「烏棲曲」の例も同樣だと言える。しかし、そこで「無賴」と形容された「鷄」は時を告げる家禽であり、人の外の世界に存在する自然と全く同じではない。「無賴汝南鷄」から「春無賴」までは隔たりは決して小さくはないだろう。

杜甫の獨創性をそこに見ることができると思う。(2)と(4)は、「無賴」とされる「春色」を構成する要素を具體的に取り出したもので、(2)では「花」と「鶯」、(4)では「桃花」と「柳絮」がそれである。

春という季節は生命感の横溢する季節である。その象徴ともいうべき花盛りは人の心を波立たせ、惱ませる。とくに老人にとってはまぶしい光景であると言ってよいだろう。だから、杜甫は「無賴」、無遠慮だ、とうたったのだった。したがって、頷聯に「一日中醉っていれば、この老いぼれも春に耐えられましょう」と續くのは自然な流れではある。ただし、この頷聯、さらには頸聯、尾聯には、貴公子鄭駙馬に對する型通りの謙遜の意もこめられているのであって、四十代であったとはいえ、そのまま杜甫自身の實感のこもった表白とは取り難い。⑥ただ、「韋曲花無賴」は杜甫得意の措辭であったろう。

二

では、「無賴」は唐詩においてどのように使われたのであろうか。すでに注④で觸れたように、唐詩においては杜甫以前に「無賴」の用例は見られない。勢い、それは杜甫以後、中晩唐の狀況はどうであったかということになる。

杜甫以後、おそらく初めて詩に「無賴」を用いたのは、韋應物であり、原義で用いている。⑦

(1)　少事武皇帝　少くして武皇帝に事え
　　無賴恃恩私　無賴にして恩私を恃む
　　（「逢楊開府」）

しかし、楊巨源（貞元五年進士）の次の例は明らかに杜甫を下敷きにしている。

(2)　若道春無賴　若し春は無賴なりと道わば
　　飛花合逐風　飛花　合に風を逐うべし
　　巧知人意裏　巧みに人の意の裏を知りて
　　解入酒杯中　解く酒杯の中に入る
　　（「與李文仲秀才同賦泛酒花詩」）

「若道春無賴」は杜甫を踏まえているに相違ないのだが、杜甫をそのまま繼承したものではない。「もし春が無賴ならば、落花は風とともに飛び去るはずだが、こちらの氣持ちを分かって杯に入ってくれる」というのは、杜甫を襲いながら逆方向へ一捻りしている。同じく中唐、元和期の人、徐凝には次のような詩がある。

(3)　憶揚州

蕭娘臉下難勝淚　蕭娘の臉下　淚に勝え難く
桃葉眉頭易得愁　桃葉の眉頭　愁いを得易し
天下三分明月夜　天下　明月の夜を三分せば
二分無賴是揚州　二分の無賴なるは是れ揚州

これは當時有數の都會、揚州をうたう。[8] 起句と承句に詠ずるのは妓女との別れの思い出であり、結句に「無賴」が使われている。「天下の明月に照らされた夜を三つに分けるとすると、そのうちの二つは「無賴」な月に照らされた揚州の町の夜」というのである。この「無賴」を「可憐」「可憎」と解する説もあるようだが、そこまで原義を引申してくる必要はないだろう。繁華な都會の揚州ではさまざまな男女の別れ（主に妓女が絡んでいよう）が展開されてきたはずだ。この詩も前半二句でそうした別れの一つをうたっているわけで、揚州の月は二人の別れをつれなく照らしていたからこそ、「無賴」で表現したのである。「無賴」を月の形容として使うのはおそらく杜甫を意識しているだろうが、杜甫をそのまま襲ったとは必ずしも言えない。

事情は晩唐に入ると大きく變化する。ほとんどが春という季節を背景にしていて、うたい振りも直接杜甫を襲っているのである。とくに羅隱「寄南城韋逸人」の

(4)　杜甫詩中韋曲花　杜甫詩中　韋曲の花
至今無賴尚豪家　今に至るも無賴にして　豪家を尚ぶ
美人曉折露沾袖　美人　曉に折れば　露　袖を沾らし
公子醉時香滿車　公子　醉える時　香り　車に滿

つ

は、杜甫の「無賴」が晩唐の詩人たちにとっていかに印象的であったかを端的に示している。同様の例をさらに擧げれば、春の景物について、

(5)
花鬚柳眼各無賴　花鬚　柳眼　各おの無賴
紫蝶黃蜂俱有情　紫蝶　黃蜂　俱に情有り
（李商隱「二月二日」）

(6)
無賴夭桃面　無賴なり　夭桃の面
平明露井東　平明　露井の東
春風爲開了　春風　爲に開かせ了(おわ)るも
却擬笑春風　却て春風を笑わんと擬す
（同「嘲桃」）

(7)
柳花無賴苦多暇　柳花　無賴にして　苦だ暇多く
蛺蝶有情長自忙　蛺蝶　情有りて　長く自ら忙し
（吳融「靈寶縣西側津」）

のように、杜甫によってすでに使われたものを始め、

(8)
春風流水還無賴　春風　流水　還た無賴にして
偸放桃花出洞門　偸かに桃花を放ちて　洞門を出でしむ
（曹唐「又遊仙詩一絕」）

(9)
微黃纔綻未成陰　微黃　纔かに綻びて　未だ陰を成さず
繡戶珠簾相映深　繡戶　珠簾　相映ずること深し
長恨早梅無賴極　長に早梅の無賴なること極まれるを恨んで
先將春色出前林　先ず春色を將(と)りて前林に出だす
（段成式「折楊柳七首」其五）

(10)
蝴蝶有情牽晚夢　蝴蝶　情有りて　晚夢を牽き
杜鵑無賴伴春愁　杜鵑　無賴にして　春愁に伴う
（羅隱「下第寄張坤」）

(11)
無賴杏花多意緒　無賴の杏花　意緒多ければ
數枝穿翠好相容　數枝　翠を穿ちて　好し　相容

れん

（鄭谷「竹」）

のように、「春風流水」「早梅」「杜鵑」「杏花」と新たにバリエーションを加えたものまである。なお、次の李咸用の例の「嚴風」は寒風を指すが、季節は冬ではなく、「柳轉春心梅豔香」の句から見て初春の肌寒い風であろう。季節感は杜甫とやや異なるが、句作りは同じである。

(12)　柳轉春心梅豔香　　柳は春心を轉じて　梅豔香り
　　相看江上恨何長　　江上に相看て　恨み何ぞ長き
　　多情流水引歸思　　多情の流水　歸思を引き
　　無賴嚴風促別觴　　無賴の嚴風　別觴を促す

（李咸用「送從兄入京」）

また、次の二例は、「（秋）水」と「秋風」を「無賴」で形容する。季節が春ではなくて秋となっている點に違いがあるが、句作りはやはり杜甫を襲っている。

(13)　楚城日暮煙靄深　　楚城　日暮れて　煙靄深し
　　楚人駐馬還登臨　　楚人　馬を駐めて　還た登臨す
　　襄王臺下水無賴　　襄王臺下　水無賴にして
　　神女廟前雲有心　　神女廟前　雲に心有り

（羅隱「渚宮秋思」）

(14)　無賴秋風斗覺寒　　無賴の秋風　斗（にわ）かに寒さを覺え
　　萬條煙草一時乾　　萬條の煙草　一時に乾く
　　遊人若要春消息　　遊人　若し春の消息を要さば
　　直向江頭臘後看　　直だ江頭に向（おい）て臘後に看よ

（李山甫「柳十首」其十）

以上、中晩唐の詩人が杜甫の「無賴」にいかに影響を受けたかが見て取れよう。とくに晩唐の詩人たちにとっては、春を背景に「無賴」を用いた句の醸し出す雰圍氣はおそらく大變魅力的だった。⑨夏は苦熱の季節であり、秋や冬は冷涼感をともなう季節である。これに對して春は冬の間に蓄えられたエネルギーが解き放たれる、生命感の横溢する季

節であり、それは「無賴」と最も相性がよいと言えるのではなかろうか。杜甫はこの組み合わせを初めて詩に導入したのであり、「無賴」は杜甫によって詩語としての新たな生命を吹き込まれたのである。

三

成都時代の「無賴」に戻ろう。すでに觸れたように二例ある。まずは、上元二年、五十歲、浣花草堂での作を擧げる。

絕句漫興九首　其一

眼見客愁愁不醒　眼のあたりに客愁を見れば　愁いは醒めざるに
無賴春色到江亭　無賴の春色　江亭に到る
卽遣花開深造次　卽ち花をして開くこと深く造次ならしめ
便教鶯語太丁寧　便ち鶯をして語ること太だ丁寧ならしむ

起句の「愁」と「醒」はあまり見られないつながりだと思うが、杜甫自身の「又呈賓使君」の句、「日兼春有暮、愁與醉無醒（日と春は暮れるもの、愁いと醉いは醒めることがない）」がその注釋になろう。轉句と結句は解釋が難しい。しかし、「卽遣」は唐詩では杜甫以外に見當たらないこと、および杜甫の「聞官軍收河南河北」に「卽從巴峽穿巫峽、便下襄陽向洛陽」の句があることを考えると、右のような讀みが妥當だろう。

旅愁が消えないというのに、その上に春愁が重なるのは堪らない。それなのに、春景色はこちらの氣持ちを察してくれずに好き勝手、見る間に花を咲かせたと思ったら、鶯をくどいほどに囀らせる。杜甫にとって旅愁の上にさらに愁いを重ねる春という季節は、自らの身世に思いを致させて、なんとも對處にこまる季節だったであろう。

もう一つの例は、成都ではなくて、騷亂を避けて一時梓州にあったときの作であるが、これも成都時代に含めておく。ときに廣德元年、杜甫は五十二歲であった。

送路六侍御入朝

童稚情親四十年　童稚より情親しきこと　四十年
中間消息兩茫然　中間の消息　兩つながら茫然たり
更爲後會知何地　更に後會を爲すは　知んぬ　何れの地ぞ
忽漫相逢是別筵　忽ち漫りに相逢うも是れ別筵
不分桃花紅勝錦　分(いか)らざらんや　桃花の紅きこと錦に勝るを
生憎柳絮白於綿　生(げ)に憎む　柳絮の綿より白きを
劍南春色還無賴　劍南の春色　還た無賴にして
觸忤愁人到酒邊　愁人に觸忤(さか)らいて　酒邊に到る

首聯と頷聯は路六侍御との再會と別れを言う。頸聯に至ると、前詩と同じように、春の景物から「無賴」なるものとして「桃花」「柳絮」を取り出している。「無賴」の「春色」は、別れの悲しさを理解してくれずに送別の宴を取り巻いているわけだが、ここで杜甫の「無賴」の内包するニュアンスについて少し考えてみたい。というのも、杜甫の影響を強く受けた晩唐の詩人たちの「無賴」の中には注目すべき特徴があるように思うからである。

花鬚柳眼各無賴　花鬚　柳眼　各おの無賴
紫蝶黃蜂俱有情　紫蝶　黃蜂　俱に情有り
（李商隱「二月二日」）

柳花無賴苦多暇　柳花　無賴にして　苦だ暇多く
蛺蝶有情長自忙　蛺蝶　情有りて　長く自ら忙し
（吳融「靈寶縣西側津」）

蝴蝶有情牽晚夢　蝴蝶　情有りて　晚夢を牽き
杜鵑無賴伴春愁　杜鵑　無賴にして　春愁に伴う
（羅隱「下第寄張坤」）

多情流水引歸思　多情の流水　歸思を引き
無賴嚴風促別觴　無賴の嚴風　別觴を促す
（李咸用「送從兄入京」）

杜甫は「無賴」を用いた對句は作らなかった。しかし、杜甫の「無賴」に影響された晚唐の詩人たちは、往々にし

て「無賴」を「有情」や「多情」と對にしているのである。「有情」や「多情」と對になれば、「無賴」は「無情」につながってゆくだろう。「無情」とは、人と異なって感情を持たないことである。つまり、晩唐の詩人たちは、杜甫の「無賴」に、春の景物は人と違って無情なるがゆえに、こちらの氣持ちを理解してくれない、といったニュアンスが含まれていると感じ取ったのではなかろうか。⑩實際、成都時代の杜甫の「無賴」は、そうしたニュアンスを含む「無賴」として理解できるように思う。

元來「無情」のものである鳥や花などの動植物、自然現象、さらにはそうした諸々の要素で成り立っている「春色」、それを人と同じ有情のものと捉えて「無賴」とはいうものの、結局は無情のものではないかとの不滿を覺える、杜甫の「無賴」はそんな氣分を內に持つ。單に無情のものに有情である人の動作をさせる、一般的な擬人法とは少しずれるように思えるのである。そして、「絕句漫興九首」其五も、そうした擬人法の例の一つだと言える。

絕句漫興九首　其五

腸斷江春欲盡頭　腸は斷たる　江春　盡きんと欲するの頭

杖藜徐步立芳洲　藜を杖いて徐かに步み　芳洲に立つ

顚狂柳絮隨風去　顚狂なる柳絮は風に隨って去り

輕薄桃花逐水流　輕薄なる桃花は水を逐って流る

首句は惜春の情がこめられていると見てよいだろう。この句は唐詩において「斷腸」の語が惜春と結びついたごく初期の例のようなのだが、いまは觸れないでおく。⑪問題は轉句と結句で、「無賴春色」と同樣に、「顚狂」と「輕薄」がそれぞれ「柳絮」と「桃花」を修飾しているのである。「顚狂」と「輕薄」は、これも「無賴」と同樣に、人の氣性や行動のマイナス面を指した語である。⑫これらの語に修飾されて「柳絮」も「桃花」も擬人化されているわけで、これもまた「無賴」の場合と同樣に、「無情」のニュアンスを帶びていると言えるだろう。また、「顚狂」「輕薄」と

もに、擬人的用法は杜甫以前には見當たらない。[13] この點でも「無賴」と同じなのである。もう一つ例を擧げるとすれば、「江畔獨步尋花七絶句」其三の「多事（おせっかい）」が擧げられる。

江深竹靜兩三家　江深く竹靜かにして　兩三家
多事紅花映白花　多事の紅花　白花に映ず

とはいえ、「無賴」や「顚狂」、「輕薄」、さらには「多事」が自然に對する杜甫の單純な反發を表しているわけではない。杜甫は動植物や自然に呼びかけたり、人の動作をさせる形で自然に寄り添う一般的擬人法も使っている。その例をいくつか擧げてみよう。

江山如有待　江山　待つ有るが如く
花柳更無私　花柳　更に私無し
（「後遊」上元二年）

好雨知時節　好雨　時節を知り
當春乃發生　春に當たりて乃ち發生す
（「春夜喜雨」上元二年）

清風爲我起　清風　我が爲に起こり
灑面若微霜　面に灑ぎて微霜の若し
……
我生無根蔕　我が生　根蔕無し
配爾亦茫茫　爾に配するも亦た茫茫
（「四松」廣德二年）

さらに、「無賴」の使用された「絶句漫興九首」のうちにも一般的な擬人法を見ることができる。

恰似春風相欺得　恰も似たり　春風の相欺き得たるに
夜來吹折數枝花　夜來　吹いて折る　數枝の花
（「絶句漫興九首」其二　上元二年）

熟知茅齋絶低小　茅齋の絶えて低小なるを熟知して
江上燕子故來頻　江上の燕子　故（ことさら）に來ること頻り

なり

銜泥點污琴書內　泥を銜んで琴書の內を點污し
更接飛蟲打著人　更に飛蟲を接えんとして人に打著す

（「絶句漫興九首」其三　上元二年）

こうした一般的擬人法に比べて、「無賴春色」で代表される擬人法は杜甫の感情を丸ごと對象に注入した擬人法といえ、杜甫は成都時代に、新たな表現のかたちを確立したのである。[14]

おわりに

四十八歳で官を棄ててからの、家族を引き連れた杜甫の苦難の旅は、成都に至ってひとまず終わり、ようやくささやかな安らぎを得た。當時は現代より遙かに自然が豊かで、これに接觸する機會も多かったろうが、百萬都市長安での生活や戰亂の中での生活に比較すれば、草堂での生活は杜甫にとって久し振りに自然との濃密な交流を可能にしたに違いない。その成都時代に、杜甫といえば必ず言及されると言っても過言ではない句が書かれている。

爲人性僻耽佳句　人と爲り　性僻にして　佳句に耽り
語不驚人死不休　語の人を驚かさずんば　死しても休まず
老去詩篇渾漫與　老い去りて　詩篇　渾て漫與
春來花鳥莫深愁　春來りて　花鳥　深く愁うる莫かれ

（「江上値水如海勢聊短述」）

「語不驚人死不休」は、それまでの詩作に對する杜甫の矜恃を示す。このとき杜甫が具體的にどの作品を念頭においていたかは、もちろんよく分からないが、「驚人」の語とは、人と社會についての思索とそれを表現しようとする意志によって生み出されたものであったと思われる。ところが杜甫は轉句「老去詩篇渾漫與」において、そのような

詩はもう作れないと言う。しかし、自然に接するその時どきの自らの感慨を瞬時に寫し取る感性に關していえば、杜甫は全く衰えていなかった、というより、成都時代にさらに鋭敏になったのである。その代表が「春と無賴」だった。「莫深愁」と呼びかけられたにもかかわらず、相變わらず詩中に引っ張り出された花や鳥たちには、少々迷惑な話だったかも知れない。

註

① 以下、杜甫の詩は編次を含めて仇兆鰲『杜詩詳注』（以下『詳注』）に據る。

② 王天海『意林校注』（貴州教育出版社、一九九八）二六八頁。

③ たとえば近年では、劉瑞明「〝無賴〟詞義辨誤及梳理」（『湖北大學學報（哲學社會科學版）』一九九五年第三期）、張傳曾「從杜詩訓釋看〝無賴〟的詞義發展」（『濟南大學學報』第一一卷第二期、二〇〇一年）が「無賴」の語義を論じているが、同樣の傾向がある。

④ Cの煬帝の例以降、隋唐の詩では、杜甫以前に「無賴」の用例が見つからない。これは注目されることだが、現時點では筆者はこの點に關して解釋を持ち合わせていない。なお、煬帝の「無賴」は唐詩では繼承されず、宋詞に至って繼承されたようである。いま參考のために賀鑄と周邦彥の例を擧げておく。

個儂無賴動人多。是橫波。（賀鑄「豔聲歌（太平時）」）

歌席上、無賴是橫波。（周邦彥「望江南　詠妓」）

⑤ 全文を引いておく。なお、斛斯六官はこの詩によって、賣文生活をしていたことが分かるごく早い例として有名である。

故人南郡去、去索作碑錢。本賣文爲活、翻令室倒懸。荆扉深蔓草、土銼冷疏煙。老罷休無賴、歸來省醉眠。

⑥ 頸聯と尾聯の原文を擧げておく。尾聯の隱遁の口吻も、額面通りには受け取れない。

石角鉤衣破、藤枝刺眼新。何時占叢竹、頭戴小烏巾。

⑦ 以下、唐詩の引用は『全唐詩』に據る。

⑧ 宋、洪邁『容齋隨筆』卷九は「唐揚州之盛」として、徐凝の句も引きながら、次のようにいう。

唐世鹽鐵轉運使在揚州、盡斡利權、判官多至數十人、商賈如織、故諺稱揚一益二、謂天下之盛、揚爲一而蜀次之也、杜牧之有春風十里珠簾之句、張祜詩云、十里長街市井連、月明橋上看神仙、人生只合揚州死、禪智山光好墓田、王建詩云、夜市千燈照碧雲、高樓紅袖客紛紛、如今不似時平日、猶自笙歌徹曉聞、徐凝詩云、天下三分明月夜、二分無賴是揚州、其盛可知矣

⑨ 晩唐の例でこれまで擧げなかったものが二つある。いずれ

も原義に副って人を形容したものである。

綠衣宛地紅倡倡、熏風似舞諸女郎。南鄰蕩子婦無賴、錦機春夜成文章。

（陳陶「蜀葵詠」）

南陌來尋伴、東城去卜鄰。生憎無賴客、死憶有情人。

（吳融「倒次元韻」）

⑩　春と結びついていない「無賴」の中にも同様の例があるので擧げておく。

生憎無賴客、死憶有情人。

（吳融「倒次元韻」）

襄王臺下水無賴、神女廟前雲有心。

（羅隱「渚宮秋思」）

⑪　拙稿「唐詩における〝斷腸〟――讀詞のための覺え書き――」（『人文研究』（小樽商科大學）第六八輯、一九八四、後に『宋詞と言葉』（汲古書院、二〇〇九）收載）を參照されたい。

⑫　「輕薄」は樂府に「輕薄篇」や「輕薄行」があるように（『樂府詩集』卷六七「雜曲歌辭七」）、古くから樂府や詩に用いられてきた語であるが、「顚狂」は杜甫以前に詩に用いた例は見あたらず、これも杜甫によって初めて詩に導入されたらしい。

⑬　杜甫自身の「曉來急雨春風顚、睡美不聞鐘鼓傳」（「偪仄行」乾元元年　長安）は、「絕句漫興」の「顚狂」を準備するものであったといえそうである。また、同じく成都時代の作とされる「絕句三首」其三は、「謾道春來好、狂風大放顚」という。

⑭　小稿では詳論しないが、杜甫の擬人法は成都時代以後に增えている。いま、成都を離れて以降の擬人法の例をいくつか擧げておく。

春知催柳別、江與放船清。

（移居夔州作）

鸚鵡含愁思、聰明憶別離。

（鸚鵡）

寒江流甚細、有意待人歸。

（夜宿西閣曉呈元二十一曹長）

岸花飛送客、檣燕語留人。

（發潭州）

影遭碧水潛勾引、風妒紅花卻倒吹。

（風雨看舟前落花戲爲新句）